What is the art ?

付録《作品事例集》

こんな制作者のこんな作品が
注目されています。こんな表現、
あなたの身近にもありませんか？

吉澤健 Takeshi Yoshizawa（1966- ） 東京都在住

彼は42歳になる。アルミ関連の会社での手作業を器用にこなし頑張っていたが、会社が倒産してしまい、今は福祉作業所で実習をするかたわら、月に数回の移動支援を利用し、街にヘルパーさんと外出する。コースは吉澤さんのお気に入りの看板がある街を巡り、彼は熱心にノートにメモを書きとめながら・看板の写真を撮りながら、歩きつづける。このノートの面白さに注目した一人の介助スタッフによって発見された。ご自宅を訪問すると、彼の部屋は不思議なもので満たされていた。新聞広告の紙束が大量にストックされており、本棚には様々な写真ファイルに混じって、セロテープがガチガチに貼付けられ封印されたノートや折り畳んだ紙束が6～70冊ほどあった。ノートの文字は一見アラビア語のように見えるがよく見ると日本の有名企業の看板広告文字が繰返し繰返し書かれ、またその日に移動した場所なども詳細に書かれているのであった。彼が書く密集した文字のノートは20歳の頃からで、年々過激度を増してきているという。吉澤健が作り出した方法は彼が生きる必死の必然が生み出したもので、誰かを感動させるための物ではない。人と表現の力とは実に不思議で面白い。

M･K（1978- ）滋賀県在住

雑誌の写真をながめながら気になるモチーフを選び出して描いている。モチーフは主に可愛い女性や動物が多いが、描き出すまでには長い時間を迷い、何度も他者に「コレを描いてもいいか」と確認をしてからやっと書き始める。彼には常に不安がつきまとっているようだ。しかし、実際に描き始めると、その形は彼流の大胆なデフォルメが施されていく。色も自分のイメージで、水性顔料のマーカーを使いカラフルに色付けをしていく。彼には知的な障害と、精神の障害の両方がある。安定のために薬の服用は欠かせないが、服用が不規則になると異常な睡魔や感情の高ぶりなどが起こり、平静を保つのが難しい。生活の中では確信の持てることが少ない彼だが、絵を描くことで安定した自分を取り戻す時間を得ているようだ。彼にとっての描画行為は、傍に居る他者とのコミュニケーションや、関係性を保つための重要な役割をはたしており、それがすなわち自己確認にもつながっている。

下田賢宗 Takahiro Shimoda（1983- ）岩手県在住

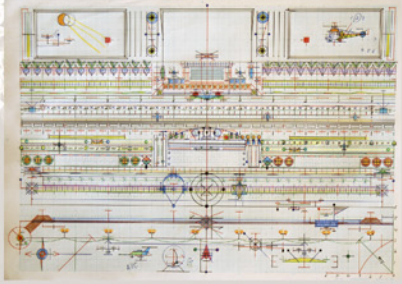
彼の作品「イクラのパジャマ」は、彼が「今一番着たい」ものとして作られた。1998年ころのことであった。色々なものに彼独特のこだわりがあるのだが、中でもコレは執着の度合いが強烈だった。彼のパジャマからは、溢れるほどの情念の、まったくエゴイスティックなエネルギーの発露の生々しさが、ありありと見えて来て恍惚とさせられる。こうして彼のパジャマは容易には完成に至らず、イクラにステッチ縫いを加えたり、色を絵の具で何度も塗り重ねたりして、それは今も続いている。

小幡正雄 Masao Obata（1943- ） 兵庫県在住

彼は50歳くらいから、施設の給食調理室から拾って来た生臭い段ボールを集めては、夜な夜な絵を描いて部屋に貯め込んでいたらしい。描いた絵をベッドに積み上げ、日々増殖する段ボールの片隅で小さくなって寝ていたという。それでも大掃除の度に大量の絵は破棄されていた。モチーフの多くは自らの人生にはまったく無縁であった「結婚式の男女」や「家族」。そして大半の人間像には性器が丹念に描かれている。理由を尋ねると、「男がいて女がいる。間にいるのは子供。どれが欠けても駄目でしょう？人はそうでなくてはならないのだよ。」と力説する。色は何よりも赤が好きで、大半の絵は赤を基調色とし、服もそうである。彼の絵は、たまたま施設の絵画指導に来ていた画家の目に止まり外部に紹介された。それ以後、何度も展覧会が開かれるようになり、作品も保管されるようになっている。

澤田真一
Shinichi Sawada（1982- ）滋賀県在住

彼の作業場は滋賀県の山奥にある窯場。少女のようにしなやかな細長い指で、小さなトゲをひとつひとつ植えつけてゆく。自分の決めごとに従って忠実に刻まれていく時間そのものが自閉症という障害をもつ彼の不安な心を支えている。同じ作業場で粘土造形をする精神障害のある男性の動作が彼にインスピレーションを与え、それから彼は猛然と粘土造形をはじめたらしい。制作は意外とスピーディーに進み、大きい作品も4～5日で仕上げる。トゲトゲしているのに、なんともユーモラスな愛らしさ。その不思議な魅力で彼の作品は多くのファンをもつ。



山崎健一 Kenichi Yamazaki（1944- ）新潟県在住

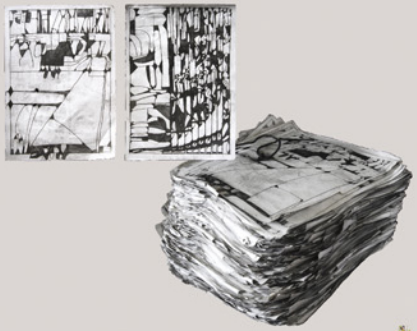
彼は36歳から今年でもう25年間の病院暮らしになる。精神病が発症したのは20代の半ば頃のようだが、東京の土木建設の出稼ぎ人夫として働いていた頃だという。彼はベッドサイドの引き出しからケース入りの専門家用の製図道具を出し、その道具で方眼紙に描いている。彼がくり返し描いているモチーフはユンボやクレーンやコントロールセンター。「私は大事な仕事をしているのだ。」と話しながら、彼はこの絵の中で世界を図面で構築し、自ら動かしてさえいるのだろう。

青木尊
Takeru Aoki（1968- ）福島県在住

とにかく徹底して濃いご趣味である。ちあきなおみ。八代亜紀。プロレスのタイガージェットシン。アラレちゃん。これらについて話しているだけでもう一人で興奮している。「ヒャー。ドキドキするなー」と泣きそうな笑顔で身体をよじらせている。そんな激情をじっくりと燃焼させるように、細かく執拗に描き込んでゆく。強い筆圧がかかるボールペンの先で紙も破れんばかりだ。
施設に入所当初から「紙ください」と事務所によくやって来た。全編暗唱している演歌を歌いながら描くのが至福の時だという。歌っている内にどんどん陶酔。身も心も絵も、こうしてデキアガッテいくのだから羨ましい。

久保田洋子
Yoko Kubota（1977- ）滋賀県在住

彼女は女性向け通信販売のファッション雑誌を熱心に見ながら、中でも一層挑発的な魅力に満ちた写真を選び出し、絵に描いてゆく。特に関心の強いヘアースタイルや化粧の部分、また美しくセクシーなタイプの洋服を描く時には、自分で独自のアレンジを加えて強調をする。髪はどんどん大きく波打ち、口紅は紅く濃く、色鉛筆がごりごりと音を立てるほどの筆圧で何度も塗り込んでいく。堂々としたセクシャリティーをアピールする自分の絵の中の女性にうっとりと見惚れながら。彼女の描く女性像は彼女自身の憧れの投影であり、同化の願望の表象である。

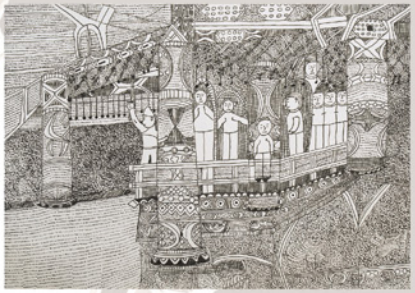


戸來 貴規 Takanori Herai（1980- ） 岩手県在住

B5判の紙に不思議な幾何学模様が描かれ、高さ約30cmに積み上げられて、事務用の黒い綴り紐で無造作にとじられている。紙の中央部あたりに強引に紐通しの穴が開けられており、それは1000枚以上もの枚数の束であった。施設の職員によると「実はこれは文字です。彼の日記なのです。」と言う。よく見るとその“日記”は、日付と気温の部分の数字が毎日違っているだけで、他は全部まったく同じことが書いてあった。『きょうはラジオたいそうをやりました ･･･中略･･･ みそしる うめぼし ぬりえ クービー のり 牛乳」そして裏面には「3月15日水曜日 天気晴れ気温16℃ へらいたかのり」。模様（？）を指でなぞりながら、その職員が本人から聞き出した記述の翻訳だ。そう言われてよく見ると、確かに平仮名まじりの「文字」なのである。日にちの数字に1を加えた数を温度の数字にする、という彼独自の規則もあるという。
一般のルールに乗れない表現というものは常に孤独である。現に過去10年以上の“日記”はすでに破棄され存在しない。一見無造作に開けられた綴り紐の穴も、よく見ると日記の中にその位置がきちんとあらかじめ印してあった。何という奥ゆかしい誠実さ。切ないほどの頑固な規則性。しかし、人は誰でもそうやって、ささやかな自分の日常にこだわって毎日を生きているような気がしてくる。

鮒万里絵
Marie Suzuki（1979- ）長野県在住

通信制の高校を卒業してからは通所の作業所に通い、パソコンの仕事などをしている。小さい頃から絵が好きで描画力もある。このような独創的な絵を描き始めたのは、昨年から。誰にも干渉されないで、思う存分イメージの世界に浸り、描くほどにそれは躍動的な動きを加え、言葉にできぬ思いを昇華させているようだ。イメージの具体化はさらに新しいイメージを生み、若い彼女の脳裏には、関を切ったようなエネルギーがまだまだ溢れてゆくのだろう。



高橋和彦
Kazuhiko Takahashi（1980- ）岩手県在住

彼は5年ほど前から施設内のアトリエ活動の中で絵を描き始めた。中学生の頃から何十年この方、絵など描いたことはなかったという。黙々と働き続けた人生だった。自分が馴染んだ風景や出来事を、時には写真などを参考にして描いている。彼の絵を見ているとさまざまな時間を感じる。遠い昔、子供だった頃のありあまるほどの豊かな時間。その記憶を紡ぎ出し描いている彼の長い長い時間の旅。彼をサポートする若い職員が、施設の中で孤軍奮闘しながらアート活動を立ち上げ、その表現を見守っている。

岩崎司
Tsukasa Iwasaki（1928-2006）岩手県生まれ

彼は岩手県盛岡市の精神病院で78歳の生涯を閉じた。若い頃は市会議員を務め、理想の世の中をつくる大志と夢に燃えたが、その情熱の過剰さに押しつぶされるように心を病んでいった。いつも病院のベッドの回りには、溢れるように描かれた大量の絵画と詩歌が貼り巡らされ、彼の尽きない夢と幻想世界が展開された。大掃除の度に破棄されていたが、その価値に気付いたボーダレス・アートミュージアムNO-MAと高知市の研究者に収蔵されている。

What can we do through the power of art ?